

Title	若者よ、熱く生きる
Sub Title	
Author	藤岡, 幸夫(Fujioka, Sachio)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2012
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2012.),p.37- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20120000-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若者よ、熱く生きろ

指揮者

藤岡 幸夫



ふじおか・さちお 一九六二年東京生まれ。四歳でピアノ、十歳でチェロをはじめ。慶應義塾大学文学部卒業。日本フィルハーモニー交響楽団の指揮研究員を経て一九九〇年に渡英。英国ノーザン音楽院指揮科卒業。一九九二年マンチェスターにて最も才能ある若手指揮者に贈られる「サー・チャールズ・グロヴス記念奨学賞」を特例で受賞。一九九四年BBCフィルハーモニックの副指揮者に就任。ロンドンの夏恒例の名物「プロムス」に同オケを振りデビュー、大成功を収める。以後ロイヤルフィル、ロイヤル・リヴァプール・フィルをはじめ数多くの海外オーケストラに客演。その後、マンチェスター室内管弦楽団首席指揮者、日本フィルハーモニー交響楽団指揮者を経て二〇〇〇年より関西フィルハーモニー管弦楽団正指揮者、二〇〇七年からは首席指揮者。二〇〇二年度渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。

遊び呆けた大学時代

こんにちは、藤岡幸夫です。「若者よ、熱く生きろ」という今日の講演タイトルは気軽に決めてしまったんですが、日吉に着いて正門に掲げられている看板を見たら、急に恥ずかしくなってしまうしました。でも、若い方たちが今日の僕の話聞いて今すぐにぴんとこなくても、何年か経ったときに、「あー、暑苦しい指揮者があのときこんなこと言っていたな」と思っていただけるといいなと考えています。

僕は本当はあまり自分の話をしたくないんです。今日も、僕が今まで経験してきたことや携わってきた人たちの話をしようと思うのですが、最初はどうしても自分の話をしなければならぬので、ちょっとだけお話しします。

僕は慶應慶應義塾中等部、塾高を経て、大学は文学部を卒業しました。僕が指揮者になりたいと思つたのは結構早くて、小学校四年生ぐらい。中等部で剣道部にも入っていたけれど、器楽をやつて、塾高ではワグネル（慶應義塾高校ワグネル・ソサエティ・オーケストラ）に所属しました。塾高の三年、ワグネルの指揮者をやっていたころまでは指揮者になることだけを夢見て、それに向けて邁進していたんですね。

ところが高校三年生のバレンタインデーに地下鉄で東洋英和の女の子からチョコレットをもらったんです（笑）。それまでの僕は、クラシック以外の音楽は音楽だと認めていなかったぐらいクラシック一辺倒。ところが、その子はまったくクラシックを聴かない子でした。若い皆さんは「オフコース」って知っていますか？ ♪さよなら、さよなら♪って知らないかなあ。その子は当時、オフコースやサ

ザンオールスターズなどを聴いていた子で、そういう音楽を初めて聞かされた僕は、「ベートーベンやブラームス、チャイコフスキーだけじゃなくて、こういう音楽があるんだ」と、まるでパンドラの箱を開けられてしまったわけです。さらに当時は一九七〇年代から八〇年代のことですから、何と云ってもデイスコです。もうとにかくデイスコミュージックやニューミュージックなどおもしろいことをたくさん教えられて、僕はどんどんそっちに流されていきました。

高三といえは思春期真っ只中でしょう？ みんなも分かんと思うけれど、だいたい思春期に同じ年の彼女ができると、男よりも女の子の方が大人なので、男の方が影響を受けちゃうわけです。そんなふうにはかに楽しいことがありますて、「こんな人間が指揮者になっちゃいけないな」と思いながら、大学生になりました。

慶應大学文学部に入ったのですが、僕は部活もサークルもなにもやらないで、大学一、二年の間はもうハチャメチャに遊んでいました。今思うと、指揮者になりたいという夢を一生懸命にあきらめよう、あきらめようとしていたんですね。ピアノのレッスンだけは続けていたけれど、海に行つてヨットレースをやったり、毎晩六本木のデイスコに行つて踊つたりと、とにかく遊んでいました。

渡邊暁雄先生との出会い

とことん遊ぶだけ遊んで、遊びあきたところに、神様っているんですよ、大学三年の夏に、当時日本を代表する渡邊暁雄先生という有名な指揮者にお会いすることができました。「君をテストしてあげ

るよ」と渡邊先生の家に呼ばれて、いろいろテストされたのですが、実は僕はテストの結果、「君は才能がないから、指揮者は無理だよ」と言われたら、そのままサーフショップの店長でもやるうと思っていたんです（笑）。でも先生は「君は本当に才能があるよ」と言ってくれださった。生まれて初めてそう言われました。「君は本当に才能がある。内弟子にしてあげるから、明後日からうちにいらっしやい」と言われて、そのときからすっぱり遊びをやめました。その後は、先生の家に週五日通って勉強をして、先生がリハーサルに行くときには運転手や荷物持ちをして……と、内弟子みたいになったおかげで、まあ、大学も無事に卒業できたんです。

慶應義塾大学というのはいすごいところだと思います。僕ね、大学時代にキャンパスに行った思い出がほとんどないんですよ。サークルも入っていないし、今言ったように大学一、二年のときは遊びに夢中だったから、大学なんて行っていない。昼間は湘南に行って、大きなクルーザーのクルーをやってヨットのレースを楽しんでいた。当時はバブルだったから、男は海に行って色が黒ければもてた時代なんです。それで夜は六本木に踊りに行くわけだから、大学なんて行っている暇がないわけです。大学三、四年のときには、今度はプロの指揮者になることに決めたくわけで、渡邊暁雄先生の家に行くと、先生についてプロの勉強をするのに一生懸命で、これまた、大学に行っている暇なんかありません。それでもちゃんと卒業させてもらえるんだから、この学校はすごい（笑）。

しかも、僕は中学の頃から成績が落第ぎりぎりですと来たんです。ストレートで卒業できたんだけれど、常に赤点ぎりぎりだった。それなのに、今こうやって「人間教育講座」の講師に招く慶應はすごい（笑）。本当にそうです。みなさんは今、そんなことを感じていないかもしれないけれど、慶應

というところは、卒業してしばらく経ったときに「ああ、慶應でよかったな」と思うチャンスがいっぱいありますから。その一体感はずごいですね。

僕は「一流」という言葉を好きではないのですが、ほかにいい言葉が見つからないので、とりあえず「一流」という言葉を使います。やっぱりこれからの日本、慶應の若い学生さんたちに一流の人間になってほしいと思います。「一流」と言っても、肩書きが偉いとか、お金をたくさん持っている、あるいは社会的地位が高いという意味ではないんですよ。やはり人として一流であってほしいと思うし、僕もそういうふうになりたいと思っています。僕自身は今年で五〇歳になりますが、まだいろいろなことを勉強している最中だし、決して自分が一流だとは思っていません。ただ、学生のみなさんに比べると三〇年近くは歳を取っているわけですから、経験はみなさんよりもあると思うので、そういう経験を少しお話できればいいなと思っています。

リーダーは迷わない！

その後、僕はイギリスの音楽大学に五年間留学して、その間にBBCフィルハーモニックでデビューする機会がありました。生まれて初めてのプロのオーケストラでの指揮者デビューです。ヨーロッパ中にFMライブ放送されるといっても大きなコンサートの最初のリハーサルのように、僕はとてもいい勉強をさせてもらいました。

オーケストラが指揮者の言うことを何でもきいてくれるなんて、そんなことは指揮者が七〇歳、

八〇歳になったときの話で、プロの世界はそんなに簡単じゃないわけです。当然、僕がデビューのときにしても、「東洋の小僧がいるな」というようにBBCのオーケストラのプレイヤーたちは思っている。それでも僕にとっては生まれて初めてのデビューだから、すごく気合いを入れてやっていました。チャイコフスキーの交響曲六番「悲愴」という曲のリハーサルを始めて一〇〜一五分ぐらいだったかな、ヴィオラを弾いている首席奏者のおじさんが、僕が注文を出したら、「そんなことはできない。オレはもう何十年もこの曲をやっているし、何百回もやっているけれど、そんな注文は受け付けられない。しかもオレはこの曲をカラヤンとやっているんだ」。若いみなさんは知らないかもしれないけれど、カラヤンというのはとても有名な指揮者です。「この曲をオレはカラヤンと何度もやっただ。だからそんなことを言われたことがないから、できない」と言われたんです。そして僕はそこで引き下がってしまったわけです。僕よりも何十歳も年上のおじさんが、しかもカラヤンと何度もやっただからできないと言われたら、だめだなあと思っただけです。

一時間ぐらい経って休憩になりました。すると、団員の中で僕を応援してくれている人たち二〇人ぐらいが、僕の指揮者の控え室にばーっと押しかけてきて、「Who are you?」と大声で言うわけです。「おまえはカラヤンじゃない。おまえはサチオ・フジオカだろう。カラヤンでやったことがないからと言われて、そこで引き下がるな」と。

つまり彼らが教えてくれたのは、指揮者というのは、指揮台に立ったら絶対に迷ってはダメだということです。それを最初のリハーサルときにプレイヤーたちにそう怒鳴られた。指揮台の上で絶対に迷うなどというのは指揮者の極意です。そう言われた僕は開き直って、やりたい放題にやっただころ、

まあ若いから、だんだんとみんなが付いてきてくれて、その演奏会はうまくいきました。ただ、そのときはそれでよかったんだけど、そういうふうに言われたからといって、指揮台の上で「絶対にこうだ」と思ったことをがんとしてやるだけでは、人生はなかなかうまくいかないですよ。そこは難しい。

でも、君たちが社会に出てグループのリーダーになったときに、やはり一番大切なのは強い信念を持つことだと思います。僕は先ほど、大学一、二年生のころにヨットのレースをやって遊んでいたと言いましたが、そのときにひとつだけいいことを学びました。沖縄で一週間のレースをしたりするのですが、スキッパーというリーダーが「あっちでもない、こっちでもない」と迷った結果試合に負けるのと、「絶対にこうだ！」と言って、抜群のチームワークでみんながそれに付いて行って、それでも負けてしまったときって、違うんですよ。出てくるものが違う。やっぱり一番大切なのは、リーダーになったときに絶対に迷わないこと。そして「絶対にこうだ」という強い思いを持ち続けること。それがどこまで持ち続けられるかで、出てくる結果は大きく違うと思います。

総理大臣や大臣を見ても分かるじゃないですか。やっぱり「絶対にこうだ」という強い意志を持つリーダーというのは強い説得力があるんですね。そういう意味でも、いい結果をさらに出そうと思ったら、あとは経験と普段の勉強しかない。自分が納得できるまでどこまで勉強するか。そしてどこまで経験を積むことができるか。

チャンスを与えてもらえない人ともらえない人

経験というのでもやはりすごく大きいと思います。経験を積むためにはチャンスが必要ですが、そのチャンスは周りが与えてくれるんですよ。そしてチャンスを与えてもらえない人とチャンスを与えてもらえない人が出てくる。チャンスをもらっている人よりも能力があるのに、チャンスを与えてもらえない人も出てくるわけです。その差はどうやって出てくるのか。僕なりに経験を積んで考えてみると、いろいろなことを言われてすねてしまう人は絶対にだめですね。これはおそらく間違いないと思う。

僕なんか、この五〇年間「バカだ、バカだ」と言われて生きてきていて、未だにそう言われています。小さい頃に親から「さっちゃん、本当にいい子ね」なんて言われたことはなくて、常に「おまえはバカだ、バカだ」と言われていた。高校に行っても、大学に行っても、先生に「おまえはバカだ、バカだ」と言われていた。そんなふうにいるいろいろなことを言われても、すねてはダメなんです。いくら能力があっても、何か注意されてすねる人は、まわりが何も言ってくれなくなってしまうし、さらにはチャンスもくれなくなってしまうから。

人から怒られたときに、一〇のうち九は頭に来ることがあるかもしれない。でも相手は、一〇のうち一は身になることを絶対に言ってくれています。怒られたときにそれをどこまで受け入れて、肥やしにできるかどうかがとても大切なことだと思っています。僕も今でもあるんですよ。指揮者なんていろいろなことを言われて、頭に来ることもいろいろあるわけです。そんなときには「この野郎」と思いますが、もう奥歯をぐつと食いしぼる。言いたいこともいろいろあるけれど、ぐつとガマンする。

逆に言えば、立場上、言わなければいけないこともあります。

そんなときに僕はこうすることにしています。何か言われたときにはかーっとなるけれど、すねないで、奥歯を食いしばって、心の中でつぶやくんですよ、「それが男を磨くのよ」って（笑）。これはおまじない。忙しいときもそう。「忙しくてやってられない」と思っているときにも、「それが男を磨くのよ」って思うのね。女の子の場合は「それが私を磨くのよ」でも何でもいいけれど。このおまじないは結構効きますよ。

「人の悪口を言わない」という教え

大学三年のときに渡邊晁雄先生のお宅に最初にうかがったときに、教えていただいたことがあります。先生が「まずそこに座りなさい」とおっしゃって、教えてくださったことです。

僕は、渡邊晁雄先生の弟子を五年間していました。先生が亡くなるまで僕は先生の内弟子で、先生が亡くなってからイギリスに留学したわけです。晩年、渡邊晁雄先生はガンで入院なさっていて、もうご自身の死期が近いと分かっていたらしい。あるとき、僕が面会に行くと、面会時間がもう過ぎていたので部屋の照明は消されていました。こっそりドアを開けたけれど暗いので、帰ろうかと思ったら、先生が「サッチーノかい。来るのを待っていたよ」と言って、部屋の電気をつけてくださったんです。先生は僕のことをサッチーノって呼んでいたんですね。それから九〇分間ぐらいいろいろな話をしてくださいました。そして、それが最後の渡邊晁雄先生のレッスンになりました。指揮の極意やテクニッ

ク、解釈などいろいろな話をして、最後の最後に渡邊先生が僕にこうおっしゃったんですよ。「最初のレッスンのときに僕が君に話したことを、君は覚えているかい？」と。それほど先生が最初に僕に教えてくださったことは、先生が大切にしていらっしゃったことなんですね。

最初のレッスンのときに晁雄先生が僕におっしゃったことはこういうことです。「藤岡君、指揮者という仕事は人に悪口を言われる仕事だ。人にいろいろなことを言われる。もちろんオーケストラのプレーヤーにも言われる。マスコミでも何でもいろいろなことを言う人がいる。絶対にいろいろなことを言われる。これは指揮者の宿命で、指揮者はいろいろなことを言われる仕事なんだ。でも、君は絶対に人の悪口を言ったらダメだよ。人の悪口は人間も音楽も汚すよ。だから君は人の悪口を言う側の人間じゃなくて、言われる側の人間になりなさい」。それが、僕の最初のレッスンで言われたことなんです。

今になってみると、とつても心の支えになる教えです。人間というものは上に立って目立てば目立つほど、いろいろなことを言われるんですよ。そんなときにその教えは心をゆがませません。だから、先生が亡くなられる直前の最後のレッスンで、僕が「先生、覚えています。僕は悪口を言われる側の人間になります」と言ったら、先生はにこっと微笑んで「そうか、ちょっと安心したよ」とおっしゃってくださいって、「さあ、帰って勉強しなさい」というのが最後の言葉でした。これは僕のなかでとても大切にしている言葉です。

でも、おそらく悪口って言いたくなるんですよ。僕だって頭に来て、人のことを悪く言いたくなることはあるし、多分お酒を飲んだら言ってしまうこともあると思います（笑）。でも、これは僕

にとつてもはとでも大きな教えて、言われる側の人間の方が勝ちなんだと思うとすごくラクなんです。「ああ、言わせておけばいいや」って思えるから。

それでも頭に来ることはもちろんあります。僕がデビューした当時はインターネットが普及してきてところで、ネットで言われていたことをたまたま僕の友だちが見つけて、「おい、こんなこと言われているぞ」と教えてくれたことがありました。そのときには腹が立って、「この野郎！」と思っただけで、僕のホームページの管理人をしてきている人が「藤岡さん、そんなことで腹を立てたらいけませんよ。ネット上で匿名で悪口を書くようなのは放っておいたらいいんです。いい言葉を教えてあげます。『バカとはケンカするな。はたから見ると両方バカに見える』」。

これも結構有効な言葉ですよ。人生五〇年も生きていると、いろいろなバカなことを言ってくるのがあるんですよ。そんなときにも「こいつとケンカすると、端から見ると両方バカに見えるんだ」と思うと、相手にしなくなる。先ほどの「それが男を磨くのよ」と「バカとはケンカするな。はたから見ると両方バカに見える」というのは、是非皆さんにも覚えておいてもらいたいと思います。

スメタナの「モルダウ」に秘められた思い

ここで少し音楽の話に戻ろうと思います。今日僕の話聞きにここにいる人たちの半分ぐらいはクラシック好きだと思いますけれど、残りの半分ぐらいはどうなんでしょう？ 皆さんは普段、クラシックを聴くのかな。クラシック音楽には作曲家のいろいろな思いが込められているんですね。たとえば、ス

メタナというチェコの作曲家の「モルダウ」（連作交響詩『わが祖国』第二曲）という曲があります。ペートーベンの耳が聞こえなかったのは有名ですが、スメタナの耳が聞こえなかった話はまだ知られていません。「モルダウ」という曲には、源流から水がチヨロチヨロと流れ出てきて、それがどんどん大きな河に広がっていき、急流になったり、河の脇で農民が踊っていたり、月の光が差していたり……そういうイメージがあると思いますが、実は「モルダウ」という曲の自筆スコアの最初のページを見ると、「まったく耳が聞こえなくなつて」という但し書きがあるんですよ。

ペートーベンは耳が聞こえないといつても、会話は聞こえなかったけれど、ピアノの音などは聞こえていました。ところがスメタナという人はまったく耳が聞こえなかった。まったく耳が聞こえなくなつた絶望の淵で書き始めたのがあの「モルダウ」の、トトウルルルトウルルルというところから始まる冒頭部分です。あの曲で彼が描きたかつたのはただのモルダウ河の情景などではなく、それを通して愛国心を表し、さらに自分を奮い立たせていたんですよ。「自分には音楽がある」「自分にはチェコという愛する国がある」「自分には愛するモルダウ河がある」という自分を奮い立たせる思いであの曲を書いたんです。そうした名曲の裏の話を知っていると、曲の聞こえ方がまったく違つてくると思います。

恋多き男・ペートーベン

たとえば、ペートーベンはすごくおもしろいんですよ。テレビドラマ『のだめカンタービレ』を見た人は数多いと思います。この『のだめ』のオープニングに使われていたから、ペートーベンの交響

曲第七番を知っている人も多いでしょう。あの曲にもいろいろな思いが込められているんですよ。

ベートーベンというと、交響曲第五番『運命』が有名で、耳が聞こえなくて、しかも面をしていて、気むずかしくて、おしゃれもなくて、汚いかっこをして、でも偉大な作曲家というイメージがあるでしょう？　ところがベートーベンという人は若い頃、ものすごいプレイボーイだったんですよ。最初はピアノリストとしてとても有名で、ウイーンに家を三軒ぐらい持っていて、洋服ダンスには当時流行の洋服がたくさん並んでいたそうです。

彼は恋ばかりしていたんだよね。ベートーベンが女性をくどくどときに「あなたの美しさに比べれば、私の作品など芸術なんて呼ばません」というようなことを平気で言う人だった。最近、ベートーベンの親友が書いた手紙が出てきたんですが、その中で親友が「ベートーベンはすごい。一度狙った女性には全部ものにしてる」と書いているんです。ベートーベンのすごいところは、ふられたとき、後に引かないことです。ふられてもうじうじしないで、すぐ次に行く。これは大切です。とくに、今の若者は草食系とか言われるじゃない。女性を気合いでくどいて、だめだったときは、うじうじしないですぐ次に行った方がいいと思うよ（笑）。

何の話だっけ？　そう、ベートーベン。ベートーベンがどれだけすごいかというと、ベートーベンは熱いわけです。『運命』の後に書いたのが、交響曲第六番『田園』です。この『田園』がどういう曲か、ちょっとお話ししましょう。

『田園』を書く前にベートーベンは一人のすばらしい女性と出会いました。公式には彼女と恋に落ちていないことになっていますが、実は恋に落ちた証拠はあるんです。この女性が大金持ちで、彼女が

住む広い敷地内にベーターベンが引越してきて、部屋を女性から借りて、そこでこの『田園』を書き上げたわけだ。恋をしている若者には、あるいは昔恋をした年配の方にも分かるかもしれないけれど、恋をすると、普段見えている風景がより色濃く鮮やかに見えるんですね。彼女ができる、自然がものすごく鮮やかに見える。そんな恋をしているベーターベンが書いたのが『田園』という曲なんです。『田園』の最後では、自然に感謝、そしてこの女性に出会ったことに対して神様に感謝して祈って終わっています。

ところが、このすばらしい傑作『田園』を書き上げた後に、結局ベーターベンは彼女とケンカしてその家を出て行ってしまふ。その理由が本当にくだらしない。でもこのエピソードは、ベーターベンも人の子だと思えて、結構好きです。その出て行った理由というのは、ベーターベンと一緒に連れて行った下男に彼女がとてもしいいサラリーをあげていて、ベーターベンはこの二人の関係を疑って、やきもちを焼いたから。ほら、ベーターベンも人の子でしょう？

皆、愛と恋の違いは分かるかな？ 分からない？ (笑) 愛とは何か。許せるか、許せないかです。愛とは許すことなんだよ。僕はこう見えて愛妻家で、かみさんとは二〇歳過ぎからつきあっています。僕がこういうことを言うと、「藤岡、おまえ、ずっと許し続けたのかい？」と思われるかも知れないけれど、反対です(笑)。僕は三〇年間許され続けたんだね。だいたい指揮者はすぐに離婚してすぐに結婚するんですよ。だから指揮者の奥さんって二人目、三人目ということが多い。僕は二〇歳の頃から奥さんひとりあえず変わらないから、これがうらやましいときもある(笑)。僕の奥さんが変わらないのはなぜかというと、僕のかみさんが「愛とは何か。許すこと」を実践してくれているから。これは

将来君たちが絶対に直面することだと思う。この先、愛する人や友だち、仲間に信頼を裏切られると
きが必ずあるかもしれない。これは恋愛だけじゃないんですよ。社内の人間関係でもそうだし、仕事
関係でも友人関係でもそう。そのときに許せるか、許せないか。許せるのが「愛」なんです。これは
たぶん間違いないと思う。僕は死ぬ間際でも絶対に「愛とは許すこと」だと言えろと思う。

恋とは何か。恋は「する」ものではない。恋は「落ちる」ものなんだよ。恋はね、愛とはまた全然
別なんだ。「人間教育講座」でどうしてこんな話をしてるんだろう（笑）。ベートーベンの話だった。
だから『田園』を書いたときに、結局ベートーベンはその女性を愛してなかったんですね。だから『田
園』を書いた後、彼女と別れて、出て行ってしまったわけです。

ベートーベン交響曲第七番と第八番

ベートーベンが『田園』を書き終わって、彼女と別れた後、戦争が始まります。パトロンはいなくなる、
耳はますます聞こえなくなる、そんな最悪の期間が三、四年間続くわけです。『のだめ』のテーマに使
われている交響曲第七番ができるまでの三、四年の大きなブランクがこの期間です。

ところがこの三、四年が経ったところで、後に「不滅の恋人」と言われるようになる、ベートーベ
ンが生涯最も愛した女性と出会います。そして同時にパトロンができる。戦争は終わる。もう幸せ
で、幸せで、幸せの絶頂で書かれたのが、ベートーベンの七番です。とくに四楽章なんか踊り狂って
いるようなすごい曲で、知らない方は是非聴いてみてほしいと思います。異常なテンションなんです

よ。二楽章で葬送行進曲みたいなところはあつたけれど、これは戦争で亡くなった人たちへのオマージュなんですね。ベートーベンという人は「自由・平等・友愛」を掲げたフランス革命とナポレオンを強く支持した人で、そのときの戦争は「自由・平等・友愛」を掲げた戦争だったから、七番の二楽章はその戦争で亡くなっていった人へのオマージュになっている。それ以外はもう喜びにあふれて、狂っている、普通じゃない。

ベートーベンは七番を書いた翌年に、その最愛の女性と旅行に出かけます。この「不滅の恋人」と呼ばれている女性には実はダンナさんがいたんです。言葉は悪いけれど不倫ですね。だからその関係は秘密にして隠されていたから、最近までその女性の存在が公にならなかつた。ともかくベートーベンはその夫人とふたりで旅行をするわけです。不思議なことに、ヨーロッパでも日本でも不倫旅行は温泉です（笑）。ベートーベンはチェコの温泉のテプリツェというところに夫人とふたりで旅行に行つて、そこに一カ月ほど滞在します。

そして次に書かれたのがベートーベンの八番です。一カ月間、夫人と温泉にいらただけれど、その途中であちこちに出かけて離れている間、ベートーベンと彼女は一日に三通ぐらい手紙を交換してました。当時はどうしたかというところ、朝の便、昼の便、夜の便というふうには郵便列車があつて、それが郵便を配達してくる。それなのに一日に三回も手紙をやりとりするわけです。まあ、今の若い恋人同士は一日何回もメールでやりとりしているだろうから、びっくりしないだろうけれど、そういうことを手紙でやっているわけです。そういう思い出もベートーベンの八番にはたくさん盛り込まれている。たとえば三楽章には「郵便列車が着きましたよ」というポストフォルンという楽器のメ

ロデイが出てくるのですが、今で言う着メロのような思い出を曲の中に入れていたりするわけです。また八番の冒頭は「チャーチャチャチャチャーン……と始まりますが、これはどういうメロデイか。実は彼女に「あなたの子どもができましたよ」と言われたときに喜びあふれて書かれたのが、この八番の冒頭のメロデイなんです。知らない人が多いかも知れないけれど、ベートーベンには子どもがいるんですよ。

こんなふうに作曲家のいろいろな思いを知っていれば、曲の聞き方もすごくおもしろくなるんじゃないかと思います。

チャイコフスキーとブラームスのエピソード

次にお話しするのもわりと僕が好きなお話です。チャイコフスキーという作曲家とちょうど同時代に、ブラームスという作曲家がいたんですが、チャイコフスキーはブラームスをまったく評価していませんでした。チャイコフスキーはメロディメーカーで、ものすごく美しいメロディをたくさん書く人だったのに対して、ブラームスはとても哲学的で、あまり聞きやすい美しいメロディを書かない人だったんです。チャイコフスキーは、悪口ではなく、当時の音楽新聞みたいなところで自分の名前で公然とブラームスの音楽を批判していたんですね。そしてブラームスも当然、チャイコフスキーが自分のことを批判していることを知っていた。

あるとき、ブラームスはドイツのある大きな街に自分の交響曲四番を指揮しに行きました。すると

ブラームスの演奏会の翌週。その街にチャイコフスキーが来て、チャイコフスキーの交響曲第五番を指揮することになっていたんです。ブラームスはその街でそのことを知ったわけです。するとブラームスは人間ができてから、滞在を延ばして、ブラームスのことをさんざんこき下ろしているチャイコフスキーのコンサートを聞きに行きました。ブラームスが滞在を延期して自分の演奏会を聞きに来てくれたことを知ったチャイコフスキーは喜んで、コンサートが終わった後にブラームスを食事に招待したわけです。ブラームスもやっぱり人の子だよ。そしてふたりで大いに飲んで盛り上がった。最後にチャイコフスキーはブラームスに「僕の交響曲第五番はどうでしたか」と聞いたんですよ。チャイコフスキーの五番は、ナルシストっぽい曲で、とても聞きやすいけれど、最後の最後がかっこうつけすぎと感じる曲なんです。チャイコフスキーにそう聞かれたブラームスは正直に「一楽章、二楽章、三楽章と本当にすばらしい。最後の最後はちょっと軽薄でよくない」と感想を言いました。そして「チャイコフスキーは、あれだけブラームスのことを批判していたくせに、「あなたの言う通りだ」と言った（笑）。さらに自分の弟に「ブラームスに会ったらとても楽しくて、とてもいいやつだった。しかも自分の第五番の最後がよくないと言われたが、それはブラームスの言う通りだ」という内容の手紙を送っているんです。これはなかなかいいエピソードでしょう?」

僕は、この話を生活のふとしたときに思い出します。自分が生きている世界のなかにはウマが合わない人や嫌な人ってやっぱりいるんです。だけど、そういう人がいても、悪口を言うのはよくない。絶対に言わない方がいい。しかし、それでも頭に来る人がいるんですね。そんなとき、たとえば自分の将来、自分の会社や組織の将来のためにも、「こいつと仲が悪いのはどうなんだろう」と思ったとき

には、一回飲みに誘ってみるといいよ。僕も今まで、「なんだ、この野郎」と思っているのがいたんだけれど、飲みに行つて一緒に食事をする、結構仲良くなつちやつたりするんですよ。それはそれですてきなことだし、大切なことだと思う。陰で悪口を言うよりも、よっぽどいいから、思い切つて飲み誘つてみてください。それでだめだったら、もう後は知らんぷりしておけばいい。それもひとつの手です。

"Of course. I am professional."

もうひとつ、僕がとても大切に行っているエピソードをお話したいと思います。

僕はイギリスの音楽大学大学院に留学して約三年でデビューさせていただきました。大学院の四年生のときに、学生をしながら、とてもいいオーケストラであるマンチェスター室内管弦楽団の首席指揮者をさせてもらっていました。若いのにすごくありがたかったと思います。

そのときに、大好きなピアノニストと共演できるという素晴らしい機会に恵まれたんです。そのピアノニストは、今の若い人はまったく知らないでしょうが、当時、モーツアルトを弾かせたらとにかく天下一品と言われたイングリット・ヘブラーというピアノニストです。一九八〇年代ぐらまでは、どんな雑誌でもモーツアルトのピアノ協奏曲といえばイングリット・ヘブラーが推薦されるようなピアノニストでした。僕も小学生の頃から彼女が好きで、彼女のモーツアルトのピアノ協奏曲のLPは全部持っていたし、僕にとってあこがれのピアノニストだった。そのピアノニストが、僕が指揮者になった室内オー

ケストラにソリストで来るなんて夢みたいな話だったわけです。本当に楽しみにしていました。

ヘブラーとはモーツァルトのピアノ協奏曲をやることになりました。全部で四回コンサートがあって、それはそれはすばらしかった。僕も本当に見習わなければと思うのですが、一流の人たちには共通点があるんですね。彼女をはじめとして、僕もこれまでにいろいろ一流の音楽家の人たちに接してきたけれど、一流の人たちはとにかく謙虚。絶対に威張ったりしない。本当に謙虚です。ゲオルク・シヨルティもそうだったし、渡邊先生もそうだった。数えたらきりがありません。とにかくすごく謙虚です。ヘブラーという人もものすごく謙虚でした。ただ音楽はものすごく強くて美しい。それだけで僕は彼女と共演できて光栄だったので、もうひとつすごいエピソードがありました。

ヘブラーとは四日続けて同じプログラムのコンサートをすることになっていました。最初の三日間はこれまでに年に何回か行くコンサートホールや本拠地のコンサートホールなので、まったく問題がありませんでした。ところが四番目の開催地が行ったことがない小さな街だったわけです。なぜそこでコンサートをすることになったかというところ、その街の地主みたいな人がイングリット・ヘブラーの大ファンで、イングリット・ヘブラーが来るのなら、どうしても自分の街でコンサートをやってくれと言わけて、初めてその街に行くことになりました。

その四つめのコンサート会場に行ったら、まずびっくりしたのは会場が場末の映画館だったんです。音は当然ひどい。しかもピアノがフルコン（フル・コンサート・ピアノ）コンサート用の最も大きなサイズのピアノ（じゃない。ヨーロッパの映画館にはショーなどができるように、舞台があつて、そのステージにピアノが用意されていたんだけど、小さくて、しかも傷だらけのピアノでした。調律

はしてあって、とりあえず音程は何とかかろうじて合っているけれど、ひどいものだった。よくないピアノ、ぼろいピアノというのはどういうものかというところ、ドレミファソラシドと同じ強さで弾いても、出てくる音の強さが違うんです。だから同じ指のタッチの強さで弾いても、ドレミファソラシドというように音の強弱があって、同じ音量の音が出ない。

「一体どうするんだ」と言っているうちに、まずオーケストラが着きました。まだヘブラーは来ていません。オーケストラのプレイヤーももうピアノを見ただけで「これはまずい」と思うわけです。傷だらけで小さなグラランドピアノ。これが、世界のイングリット・ヘブラーが弾くピアノなのか、どうしてピアノのサイズや状態をチェックしに来なかつたんだ」といつてがんがんな怒る。しかしとにかくステージの上でヘブラーを待たせようということになりました。

それでやっとヘブラーが到着しました。僕もみんなも「どうするんだよ」と心配な顔をしていると、ヘブラーはびつくりしたりアクションをして、本番前のリハーサルでピアノの前に座ったんですね。そしてポロポロ……と鍵盤を弾いて、「Sachio, this is not a piano.」と言うわけです。「これはピアノじゃないわ。でも私たちは三日間もすでに本番をやったから、もうリハーサルはいらないでしょう。私と彼（ピアノ）とふたりだけにしてちょうだい」と。僕たちはその前まで同じプログラムで三日間練習をしているし、本番もしているのだから、「じゃあ、わかった」と言っても、ヘブラーとピアノをふたりきりにしました。するとヘブラーは本番までの二時間、ステージ上でたったひとりで、そのピアノの癖を全部習得したわけです。僕は今でもあの背中を覚えている。弾いて、弾いて、弾きこなして、どんどん自分の音に変えていくんですよ。

いざ本番になって、長い前奏が終わり、彼女が弾きだしたら、本当に別のピアノの音がするわけです。本当にすばらしい。オーケストラのプレイヤーも僕もみんな顔を見合わせて、仰天しました。演奏が終わった後、お客もブラボーと言っている。まあ、お客さんはそのピアノに関するストーリーは知らないから、単に演奏が素晴らしい、ブラボーってわーっと盛り上がっていました。

演奏が終わって、当然カーテンコールで舞台の袖にヘブラーが戻ったときに僕は思わず彼女に抱きついてしまったんです。本当にファンタスティック、アメージング、もうアンビリーバブルだと、ありとあらゆる賞賛の言葉を口にして、もう本当に素晴らしいと言ったときに、ヘブラーが僕に言った答えというのが、「Of course, I am professional.」だったんです。それを聞いて僕は、「これがプロか」と思いました。これが二流、三流のピアニストだったら、まずリハーサルでそのピアノを見た時点で、ピアノのことをほろかすに言いますよ。それでキャンセルしてしまうかもしれない。あるいは調律師のせいにするかもしれない。でも彼女はひと言もクレームを言わなかった。文句のひとつもまったく言わなかった。そして素晴らしい演奏をして、最後に彼女が言った言葉が「当たり前でしょう？ 私 はプロなんだから」。僕はその時デビューして一年半ぐらいだったけれど、「プロっていうのはこういうものなのか」と本当に思った一瞬でした。

皆さんもこれから専門職についてプロになると思いますが、絶対にうまくいかなないことがあっても、人のせいにしてはダメだということです。僕も演奏会がうまくいかなかったときに、絶対にオーケストラのせいにしたらいけないということはそこから学びました。自分の責任に任せられていたら、どこまで自分ができるか、それに挑戦して実現させるのがプロなんです。僕もへたくそなオーケストラで超一

流の演奏をして、「藤岡さん、本当にオーケストラに素晴らしい演奏をさせましたね」と言われたときに、いつか僕も「Of course, I am professional.」と言ってみたいなと思いつながら、なかなかまだ言う機会がないんだけど（笑）、そう思いながら、日々精進しています。

みんなにずいぶん偉そうな話をしちゃったけれど、自分自身もまだそういうことができているわけではありません。自分もそうしなければと思っている話を今日は皆さんに聞いてもらいました。

質疑応答

Q1 学生A（理工学部3年生） 悪口の話がありました。私は悪口を言われることに対してとても興味を持っていて、自分がどういうふうの人に思われているかを知る良い機会だと思っんです。ですから、悪口を言うことにもプラスの面があると思うのですが……。

A 悪口と批判は違いますよ。悪口というのはどこかに悪意がある。一方、批判というのはひとつの意見でしょう。僕も悪口を言われると、「ああ、なるほどな」とプラスに思うこともあるけれど、だからと言って「悪口は人のプラスになる」と自分で言おうとは思わないですよ。

Q2 学生B（理工学部博士課程） ちょっと聞くのが恥ずかしいのですが、恋から愛にはいつ変わるのでしょうか？

A それはねえ、まだ君には早いな(笑)。君にはまだまだ長い道のりだと思うよ。でも僕は、かみさんに会った瞬間に結婚すると思ったよ。それよりも君を含めた男性諸君に言っておきたいんだけど、僕たち男というのは女性に絶対になわないんだよ。だから僕は「女」なんて言葉は絶対に言えないもの。女性は崇高だから。ごめんね、全然質問の答えになってないね(笑)。

僕らは絶対になれない。女性というのはいやらしい。男は女性と喧嘩したら、とにかく何でもいから謝った方がいいよ(笑)。とにかく謝るのが基本だから。君もそういうことを経たうえて、いよいよ「愛」にたどり着くかもしれない。頑張ってね。

Q3 学生C(経済学部2年生) 師匠である渡邊さんが亡くなられた後、イギリスに留学されたというのですが、留学生活の中で最も印象に残ったことはなんでしょうか。

A 先ほど言ったデビューがうまくいったということはとても嬉しかったし、その後、僕はロンドンの「プロムス」という有名なコンサート、僕も日本でテレビで見ることがなかった、すごい大観衆が集まるコンサートに僕は出ることができたんですよ。そのときはデビューして三年目ぐらいで、そのときは一番嬉しかったかな。

これは噂で聞いていることで、君たちがどうかは知らないけれど、今の若い人たちはあまり外国に行きたがらないんだってね。でも、外国はやっぱり見てきた方がいいですよ。さつき僕はその話をしなかったけれど、はつきり言って僕は外国が大嫌いで、日本が大好きなんだ。でも、それは、外国に行つたから日本の良さが分かったから。僕も若い頃にはすごく海外にあこがれていて、日本はダメな国で、

海外の方がいい国だと思っていたけれど、僕はイギリスに一五年ぐらい住んで、やっぱり日本はすごい国だと思うようになりました。それを知るためにはやっぱり海外に行くとか分かりやすいと思う。

Q4 学生D (理工学部1年生) 講演のなかで「一流」という言葉が何回か出てきましたが、「一流の人」というのはどういう人のことを言うのでしょうか。

A 最初にも言ったけれど、僕は「一流」という言葉はあまり好きじゃないんだ。仕事が成功している人のことでもないし、社会的地位のことでもないし、「一流」という言葉は決して適切じゃないけれど、人として僕が尊敬できるといえるか、学べるというか……。これはいい質問だね。僕なりに、一緒にいて勉強になる生き方をしている人のことかなあ。

人って自分ひとりだけでは生きていけないものです。たとえば大金持ちで、暮らしに困らず、誰にも干渉されずに自分だけで生きていけるといえる人もいないけれど、多くの間人はひとりでは生きていけないわけで、いろいろな人と一緒に生きていかなければいけない。そういうなかで一緒にいたいと思える人、学べる人みたいな感じかな。

Q ちなみに、実は私の母も藤岡さんと同じ年で、しかも慶應の文学部卒なので、藤岡さんの同級生かもしれないです。

A えー、僕、学校に行ってなかったからなあ(笑)。でも君のお母さんもしかしたらナンパしていたかもしれない。男性諸君に言っておくけれど、ナンパはしなければダメだよ。「あ、この子かわいいな」「いい子だな」と思ったときに、行動して失敗するのと、何もしないで家に帰って部屋の中で「あ

の子とつきあえたらいいのになあ」と夢見るのでは人生の生きていく価値が全然違うんだよ。分かる？ ひとつだけ極意を教えておくけれど（笑）、ナンパの極意というのは、ナンパしているときに「ああ、自分は今ナンパしている」と思っていたら、絶対に成功しない。もう絶対に無理。この子と友だちになりたいと思ったら、「これは運命だ！」と思えるかどうかなんだよ。「運命だ！」と思って、明るく、気合いでアタックすれば、君たちの道は開くよ。

Q5 学生E(文学部1年生) 悪口を言われることに対する恐怖心はなかったのでしょうか。もしあったとしたら、どのように克服されたのでしょうか。

A 言われても気にしなければいいんだよ。でもさっきも言ったように、言われたことのなかにプラスになることもあって、それはプラスにすればいいし、そうじゃないからといって卑屈にならないこと。何かいろいろと言われて、こつちがシュンとしちゃったら、相手の思うつぼじゃない。そうでしょうか？ だからまずシュンとしないことが大事。

僕はいろいろな人から「藤岡は本当に明るさだけが取り柄だな」と言われて生きてきたけれど、シュンとしたり、気にしたりしないで、やっぱり明るくいくのが一番いいよ。言っていることが当たっていたら、そこから学ぶことは学んで、直すところは直す。でもだからといって言い返したら、端から見たら両方馬鹿に見えるからね。だから悪口を言う人とは絶対に同じ土俵に立たないことだよ。悪口を言われたからって恐怖心なんていらぬよ。ポジティブに生きていこうぜ。

Q6 学生F (理工学部2年生) お話の中で「指揮台に立つたら迷うな」という言葉がありました。

でもそう思っているもやはり迷ってしまうことはありませんか? もし迷ったときに最後に信じるものは何ですか?

A そう、迷うんだよね。結局、やってみなければ分からないことってあるんですよ。経験や勉強が足りなければ絶対に迷う。ただそのときに意地を張らずに、僕の場合ならオーケストラの団員の言うことは尊重する。誠意をもってオーケストラのプレイヤーに対する。でも難しいよね。その場の状況だよ。相手を信頼することが一番大事なこと。正直に「ここはあなたの言うとおりにしてみよう」ということもたまにはある。もちろん、そればかりだったら、誰も信用してくれなくなるので、すごく難しい問題です。でもいい結果を出そうと思って、自分が迷ったら、相手の意見を信頼して、尊重して、相手の意見もときには誠実に聞き入れることでしょうね。それしかないと思う。あとは気合いだよ。

気合いがなければだめなんだよ。メール一本では、まったく相手が自分の言うことを聞いてくれな
いときは、会って相手の目を見て「お願いします」と言ってみる。たとえば僕は関西フィルハーモニー
管弦楽団の首席指揮者をやっていて、お金集めなどをすることもありますが、最初はまったく相手に
してくれなかったのに、実際に会いに行つて頭を下げて、相手の目を見て熱意を伝えたら、「わかった
じゃあ応援しよう」とお金を出してくれる企業ってたくさんあります。明るいことと熱意は本当に馬
鹿にならないです。それから今の社会メールが基本だけれど、大事なときはメールではなくて、手書
きの手紙。たとえば女の子をくどくどと思つたときにもね(笑)。あるいは会いに行くとか。そういう

アナログな思いも大切なことだと思えます。

Q7 学生G (経済学部1年生) お話の中で「一流の人はみんな謙虚である」とおっしゃったのですが、謙虚であることと自分に自信を持つことは両立するのでしょうか。

A もちろん、そうだよ。だから自分に対しては厳しい。本当に誇らしい人というのは、他人に対してじゃなくて、自分に対して誇りを持っているんだよ。だから自分に対して厳しい。特にプロの職業で一流という人は、僕みたいな東洋の若造に対しても、とても丁寧な対応をしてくれる。僕が言いたいのはそういうことです。

だから自分に対して謙虚だったらダメだと思うね。謙虚なのは他人に対してだよ。謙虚というのは他人に対する態度を表す言葉だよ。だから、そういう人はみんな自分に対して厳しい。

Q8 学生H (法学部2年生) 藤岡先生が今まで指揮者として生きてきたなかで、自分が何をやっているか分からなくなったり、自分が何者か分からなくなったりしたことはありませんか？

A しょっちゅうだよ(笑)。自分なりにいろいろな誘惑に負けそうになったり、負けちゃったりしたこともある。とくに君のようにまだ若いと、いろいろな誘惑に負けやすいから、そういうときに自分を見失うよね。それで痛い目に遭うんだよ。痛い目にあつて後悔して、それが肥やしになるんだよ。そこで痛い目に遭わないで、うまく要領よく切り抜けちゃうと、あまり肥やしにならないかたりするかもしれない。それはもう人生常にいろんな悩みがありますよ。君も思いきり誘惑に負けて下さい(笑)。

Q9 一般参加者 実私は慶應義塾大学の工学部の時代に藤岡先生のお父様に教わっていました。

そのお父上のことについておうかがいしたいと思います。なかなか優しい先生ではありましたが、一面シビアナ部分もお持ちでした。藤岡先生は奔放な青春時代をお過ごしになったようですが、お父上からはどのようなサポートをお受けになっていたのでしょうか。

A 親父がすごく偉いなと思ったのは、僕が指揮者になりたいと思っていたときに、親父がしてくれたサポートです。

親父は、僕は絶対に指揮者になれない！ と思っていたんです。でも反対はしなかった。僕が真剣に指揮者になりたいと思ったのは中等部に入ってからですが、親父は音楽が好きだったし、チェロもピアノもうまかったですから、「幸夫、おまえは絶対に指揮者になれない。でも親というのは子どもが夢を持ったならそれを応援するのが親の義務だから、おれはおまえの勉強の面倒は見てやるけれど、おまえは絶対に指揮者になれない」と言われました。

小林研一郎という有名な指揮者がいます。高校一年生のときに、僕はこの小林先生のところに弟子入りに行つたんです。僕のチェロの先生が小林先生を紹介してくれたので、小林先生の前でチェロを弾いたり、ピアノを弾いたりしました。親父はてっきり小林先生が「あなたは指揮者になれないから、やめなさい」と言ってくれると思つていたんですが、小林先生は渡邊先生と違って僕に才能があるとは言わないものの、「お父さん、やらせてみたらどうですか」と言ってくれた。親父はそう言われてしょうがないから、腹をくくつたわけです。

今でもよく覚えています。親父と小林先生の家から出たときのことです。僕は高校生だから詰め襟

です。小林先生は遅咲きで、三四歳から仕事が入るようになったんですね。親父が僕に言ったのは、「やっぱりおまえは絶対に指揮者になれないと思う。でも小林先生が弟子入りさせてくれると言うし、おまえに続けてやらせると言うから、小林先生がデビューした三四歳まではおれは応援してやる。おまえが三四歳になって、指揮者をあきらめて、そうしたらおまえにできる仕事はたったひとつだ。それは結婚詐欺だ。結婚詐欺をやつて、それまでおまえに對して出してやつた金を全部おれに返せ」と言ったのが親父です（笑）。そういう親父でした。

Q 10 学生Ⅰ（法学部3年生） 僕は合唱団の学友会に入っていて、いろいろな指揮者を目にしていて、指揮者の方は指揮をするときにどういうことを考えていたり、意識していたりするのでしょうか。

A 楽譜をちゃんと勉強して、楽譜だけではなく、さつきも言ったように作曲家のバックグラウンドも出来る限り調べるし、そういうことをしたうえで感覚的だけでなく、ロジカルに自分で説得するものを見つけないといけない。そうしたうえで、「ここはフォルテだ！」「ここはリタルダンドだ！」とかやるわけです。

Q 指揮者の方を見ると、わーっと熱くなつて、オーラがぶわーっと出るときがあるのですが、そういうときは常にあるのでしょうか。

A もちろん。オーラを感じさせる指揮者なんてそうはいないから、それはいい指揮者だよ。ただ指揮者というのはすごく難しいんですね。これも男性と女性と一緒に、いわばオーケストラが女性で、

指揮者が男性。男が最初から興奮してすぐテンションが高いと、女性はしらけちゃうんだよ。そこが難しい。冷静に、そして相手を気持ちよくさせるのが指揮者の仕事なんだよね。だから君を気持ちよく歌わせることができる。

若い男性諸君、君たちは女性と一緒にいったら、相手を気持ちよく、気分よくさせるのが君たちの役目なんだよ。それがヒューマン・ピーイングなんだよ。わかる？ だから、こつちが先に盛り上がって、先にテンションが高くなったら、相手はひいちゃうから、そこはある程度計算する必要もあるでしょう。でも、オーラを感じられるというのは、いい指揮者と一緒にやっているんだと思いますよ。

Q 11 学生J (法学部1年生) 講演の中でユニークな恋愛観を…。

A ユニークじゃないよ。めちゃくちゃストレートだよ。王道だよ。少なくとも昭和の時代には王道だったんだよ、これが(笑)。

Q 私には経験が少ないので、ユニークだなと思いました。男性に対するアドバイスはたくさん出ているのですが、女性として男性を引きつけるコツがあれば教えてください。

A 僕は男性には教えられるけれど、女性に対しては分からないなあ。女性に対して教えるなんておこがましくてできないですよ。

男ってバカだからさ、みんな恋愛に関しては。言ってもらわなければ分からないことだらけなんだよ。「どうして言わなければ分からないの」というようなことも言っただけであげないと、男は分からなかったりするんだ。だからストレートに思うことをきちんと相手に伝えれば、それが一番いいんじゃないです

かね。「これぐらいのこと、言わなくても分かってよ」というようなことでも、男はバカだから、だいたい分らないと思うよ。頑張っつね。

Q 12 学生K (経済学部2年生) 僕は読書が好きなので、藤岡さんの本に関するエピソードや、これまでに感動したり、人生の糧になったりした本があればお聞かせ下さい。

A ありきたりだけど、司馬遼太郎はおもしろいですよね。僕も司馬遼太郎は片端から読んだけれど、日本人の誇りというか、自分が日本人であることを考えさせられますね。

君ぐらいの歳ぐらいのときには僕はヘミングウェイが好きだった。ヘミングウェイの『海流の中の島々』という本がすごく好きで、僕は、ヘミングウェイは絶対にB型だと思うよね。ヘミングウェイの書く本の主人公って、みんな強くてやさしいんだよ。僕にとつて、強くてやさしいのが男の究極の美学だから。もちろんそうじゃない人もたくさんいると思うけれど、僕は強くてやさしいのが男性の美学だと思っていて、それを一番学んだのがヘミングウェイが書いた『海流の中の島々』です。ヘミングウェイ自身もそういう人だったと思う。『海流の中の島々』は三年に一度は読むぐらいよく読んだ。あれを読むとね、読んでいるだけでからだに西風を感じるんだよね(笑)。バカだなあ。

Q 13 学生L (理工学部1年生) 三〇年間、奥様に許されればなしだとおっしゃっていましたが、そのなかで最も奥様に感謝していることは何ですか。

A それは山ほどあるよ！ いやあ、一番は何だろうねえ。いろいろなことを見逃してくれたことかな

あ(笑)。それが一番でしょう。ばれたときに別れないで、とりあえず見逃してくれたわけだから。僕が「愛とは許すことだ、エブリバディ」とか言うと、彼女は必ず「私はあなたを許した覚えはありません」と言うから、怖いんだよ。そういうことがいろいろと発覚したにもかかわらず、長い間一緒にいてくれることに一番感謝しますね。

Q 14 学生M (商学部2年生) 先生はいろいろなところで指揮をなさったと思います。日本のオーケストラと海外のオーケストラなど、国によって特色があれば、それを教えてください。

もうひとつ、先生が思う男の「エロさ」って何でしょうか。

A オーケストラは国によって変わると言えば変わるんだけど、たとえば日本で言えば東京と大阪では全然違うし、本当にそれぞれ個性があつて、色とりどりで。ただおもしろいのはイギリスのオーケストラはめっちゃくちや効率的で静か。難しい曲でももう一、二日で仕上げちゃうんだよね。ドイツはコツコツと真面目に時間をかけて積み上げていく。フランスやイタリア、スペインはとにかくハリサル中うるさい。それで何を話しているかという、自分の彼女の話とか、息子や娘など家族の話をペチャクチャ喋っている。スペインなどのオーケストラは、一日目にうまくいってほめちゃうと、「ああ、これでいいんだ」と思って、それからどんどん悪くなっていく。国民性だよ。それでいくと、日本のオーケストラはセンスがいい。

もうひとつの質問。「エロい」って言葉はあまり好きじゃないんだけど、セクシーかどうかというのはやっぱり野性的じゃないとダメだよ。もじもじしないで、ばしっとはっきりと意思表示をできる

男の方がセクシーなんじゃないかと思うけれど、それは女の子に聞いた方がいいんじゃないか。

ただ、君ね、プレイボーイと遊び人の違いって分かる？ プレイボーイと遊び人は違うんだよ。さつきも言ったように、男は絶対に女性にかなわない。これはヒューマン・ビーイングの鉄則なんですよ。カマキリの雌が雄を襲うことが象徴しているように、男は女性にかなわないんだよ。プレイボーイはそれを分かっている。女性にかなわないことが分かっているから、女性を大切にするんだよ。口説くときも礼儀ありで口説くんだよ。でも遊び人というのはバカだから、女性にかなわないということを分かっている。だから女性のことを「女」と上から目線で言ったりして、口説くときにも頭の中にはセックスのことしかないんだ。分かる？ プレイボーイと遊び人の違いが？ だからオレはプレイボーイなんだよ（笑）。いや、「元」プレイボーイだね。実はさ、オレのかみさん心配で、今日ここにおそらく聞きに来ているんだよ（笑）。